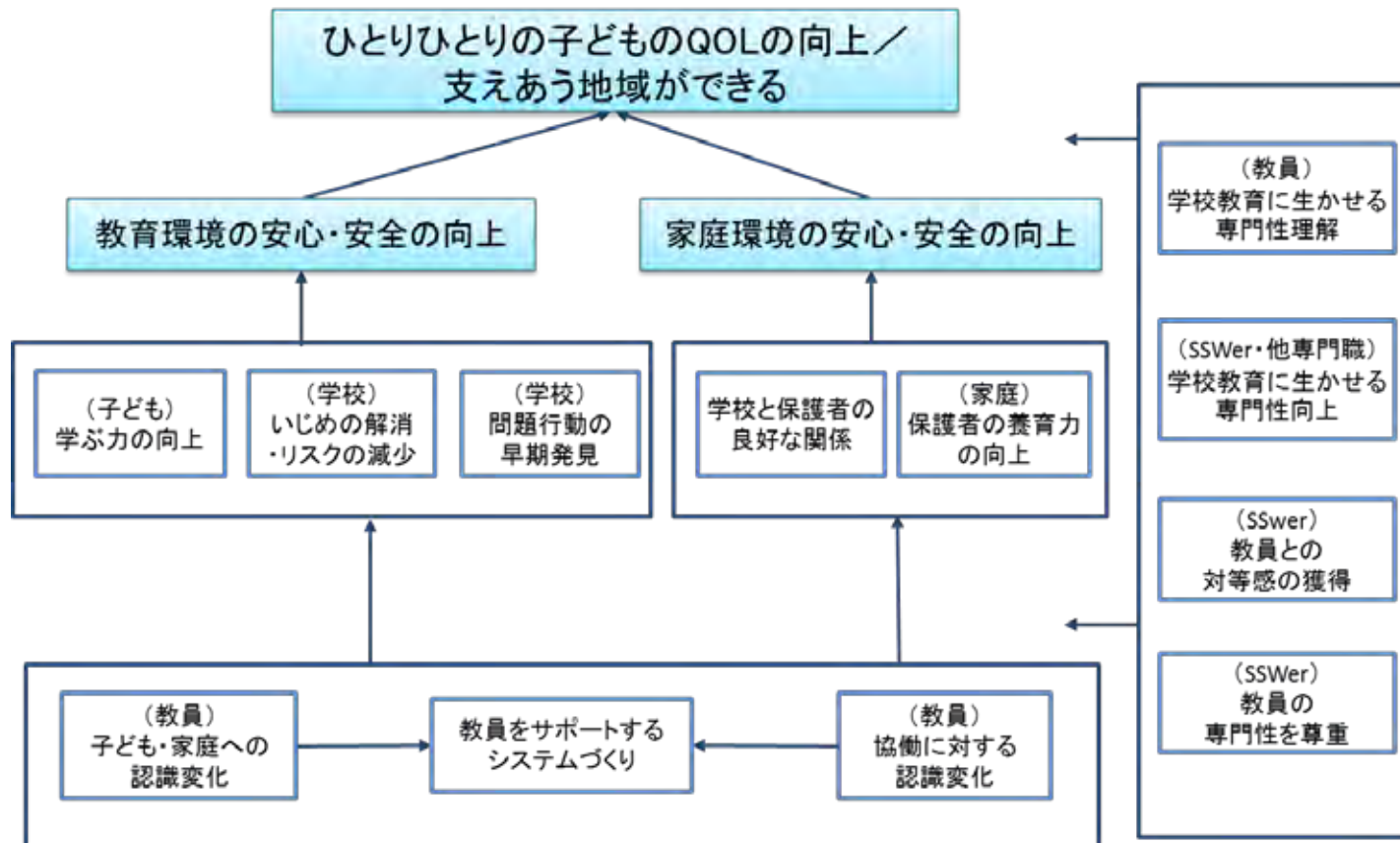


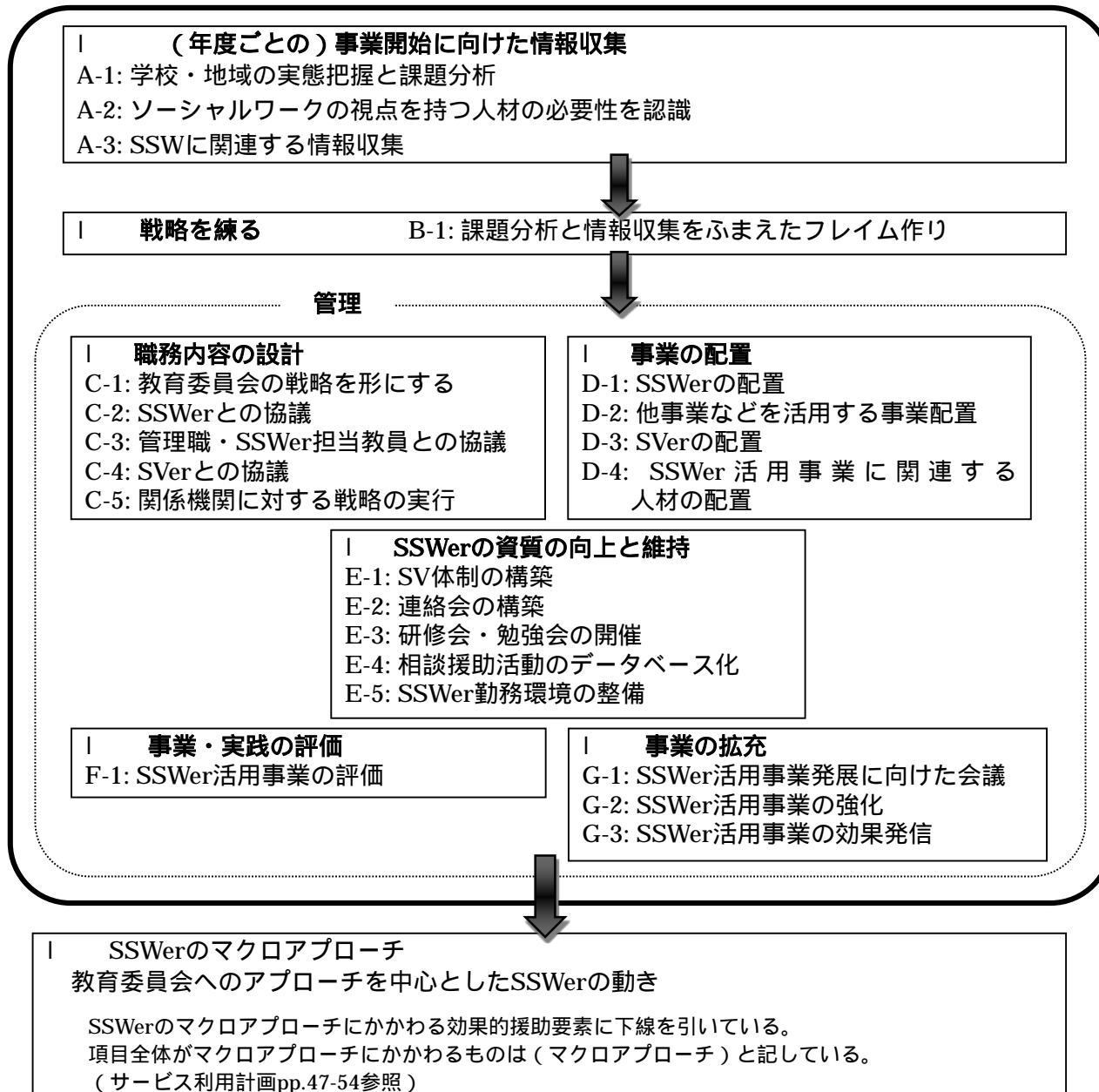
効果的なSSW配置プログラムとは

* プログラム理論: プログラムが生み出すことが期待されている社会的便益や、プログラムがそのゴールや目標を達成するために採用する戦略や戦術に関連する様式に関する一連の仮説群。プログラム理論のなかでは、プログラム活動によってもたらされる社会状況変化の性質に関連した**インパクト理論**(impact theory)と、プログラムの**組織計画**と**サービス利用計画**を示す**プロセス理論**(process theory)を区別することができる (Rossi et al. 2004 = 2005:63)。



< インパクト理論 >

< プロセス理論(組織計画) = 教育委員会の実践 >



B. 教育委員会への
アプローチ

A. 学校組織への
アプローチ

C. 関係機関・地域などへの
アプローチ

D. 子ども・保護者への
アプローチ

B-1: SSWer活用に関する目標設定

発見を生む

政策への反映

B-2: SSW活動の定期的な報告・連絡・相談、学校との調整

B-3: 困難事例などに向けた協働

B-4: プランの実行
(マクロアプローチ)

B-5: 教育委員会担当者とのモニタリング(マクロアプローチ)

B-6: SSWの手法を浸透させるための働きかけ(マクロアプローチ)

B-7: SSW事業化への働きかけ
(マクロアプローチ)

A-1: 学校アセスメント
(さまざまな資源を活用して学校の状況を把握する)

A-2: 地域アセスメント
(さまざまな資源を活用して地域の状況を把握する)

A-3: 学校や地域に潜在するニーズの発見

A-4: 学校組織に働きかけるための戦略を立てる

A-5: 教員のニーズに沿う

A-6: 相談活動の推進

A-7: 子ども・保護者の共同アセスメント

A-8: 関係機関と学校の仲介

A-9: ケース会議実施前の活動

A-10: ケース会議の実施(インテーク、情報収集・整理)

A-11: ケース会議の実施(アセスメント、プランニング、モニタリング)

A-12: ケース会議実施後の活動

A-13: さまざまなケース会議の実施

A-14: プランの実行

A-15: モニタリング

C-1: 関係機関との関係性構築
(マクロアプローチ)

C-2: 関係機関・地域などへの基本的な活動

C-3: 連携ケース会議実施前の活動

C-4: 連携ケース会議実施中および実施後の活動

A6 - A15、B2 - B4、C2、C3で実施していることは、すべて子ども・保護者へのアプローチと関連している。また、子ども・保護者との関係性構築といった項目はSWの基本であると捉えられている。

そのため、それらの項目は実践していることを前提としている。

連携をもたらす

D-1: 子ども・保護者のアセスメント

SSW実践の明確化

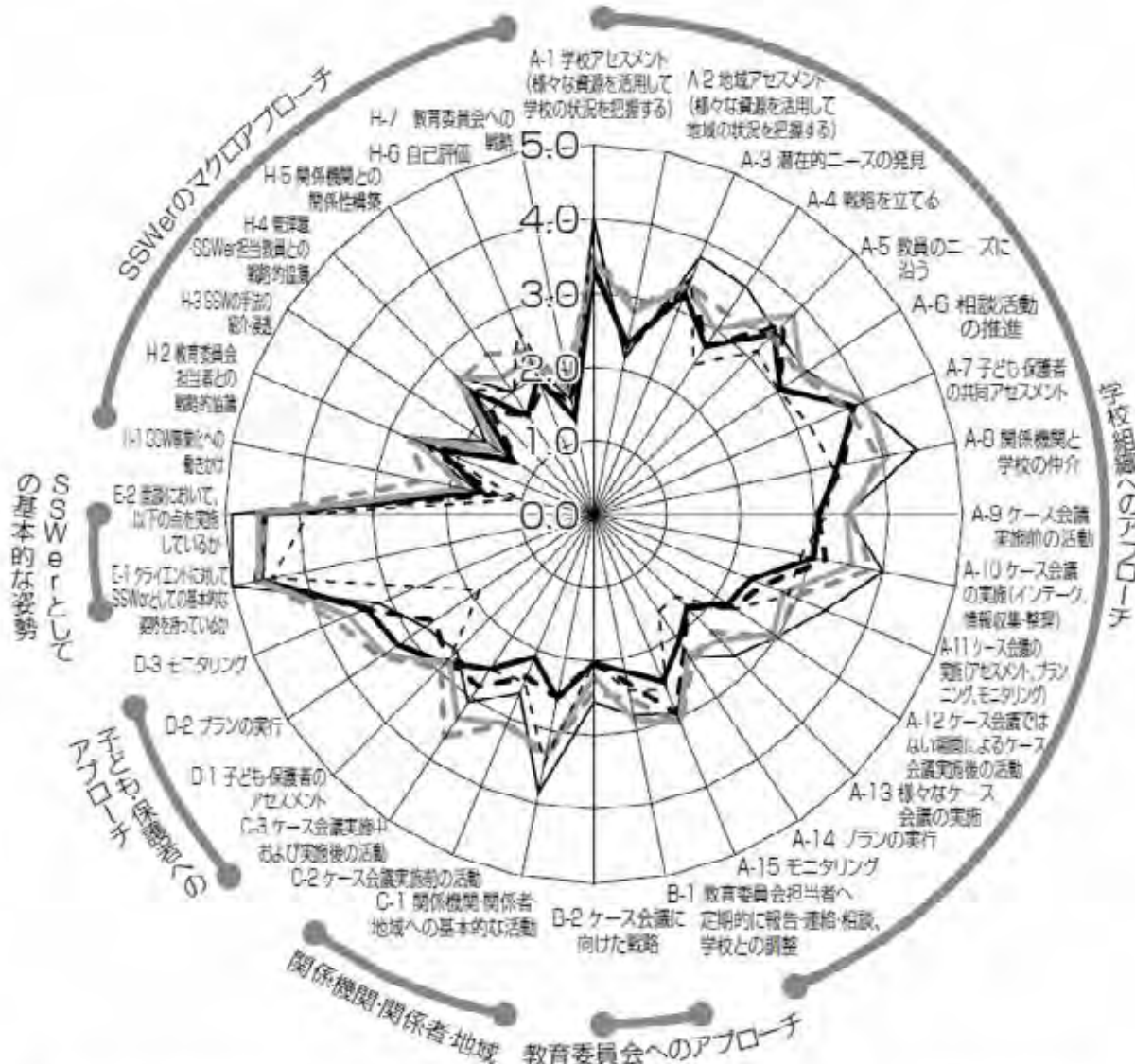
D-2: プランの実行

D-3: モニタリング

< プロセス理論(サービス利用計画) = SSWerの実践 >

SSWerのプログラム実施度比較 —予算別—

国事業採用においては、多くの項目で2回目の得点が高くなっている。
自治体採用ではプラン実行と、管理職・SSWer担当教員との戦略的協議がよく行われるようになってきている。



山野ほか(2014)を改変

—— 政令指定都市(6-9月) - - - 国事業採用(6-9月) ——— 自治体採用(6-9月)
 政令指定都市(12-1月) - - - 国事業採用(12-1月) - - - 自治体採用(12-1月)

効果:2013年度マニュアル試行調査結果

(* P<.01 ** P<.05)

相関係数が0.2以上のものを残し,0.4以上のものに網掛けをしている。

A1-H7は各回答を1-5点のアンカーポイントに変換した。インパクトは実数回答を変換することなく分析した。

サービス利用計画のプログラム実施度



教委インパクト

(12-1月)

			不登校	いじめ	児童虐待	家庭環境	教職員との関係	心身	発達障害	連携した	連携した	
	平均値	SD	解決・好転	解決・好転	解決・好転	解決・好転	解決・好転	解決・好転	解決・好転	関係機関等	校内の教職員等	
			4.54	0.43	0.60	2.71	0.43	1.43	2.11	32.00	113.43	
			9.83	2.20	1.06	6.19	1.07	4.83	5.25	116.75	287.44	
学校組織へのアプローチ	学校アセスメント (様々な資源を活用して学校の状況を把握する)	3.35	1.42			.209*				.265**		
	潜在的ニーズの発見	3.25	1.42	.203*	.291*	.392**	.266**	.290**	.265**	.357*	.395**	.335**
	戦略を立てる	2.76	1.46		.232*	.420**	.294**	.272**	.340**	.389*	.408**	.293**
	教員のニーズに沿う	3.41	1.43		.270*	.283**		.236**	.222**	.249*	.278**	.227**
	相談活動の推進	3.06	1.41	.307**		.301**	.262**	.309**	.309**	.317*	.264**	.276**
	子ども・保護者の共同アセスメント	3.59	1.38	.234**								
	関係機関と学校の仲介	3.54	1.56						.292**		.228**	
	ケース会議実施前の活動	3.04	1.60						.262**		.215**	
	ケース会議の実施 (インテーク、情報収集・整理)	3.29	1.62						.236**		.189*	
	ケース会議ではない場面による ケース会議実施後の活動	2.53	1.37						.247**		.267**	
	プランの実行	2.22	1.05	.305**								
	モニタリング	2.87	1.52			.240**			.231**	.213	.319**	
教育委員会へのアプローチ	教育委員会担当者へ定期的に報告・ 連絡・相談、学校との調整	2.41	1.40		-.291*	-.224**		-.200*				-.217**
	ケース会議に向けた戦略	2.27	1.43		-.250*			-.254**				
関係機関・関係者・ 地域へのアプローチ	関係機関・関係者・地域への基本自	2.84	1.53						.225**			
	ケース会議実施前の活動	2.56	1.61						.272**		.251**	
子ども・保護者への アプローチ	子ども・保護者のアセスメント	2.67	1.62	.213*							.208*	
SSWerとしての 基本的な姿勢	クライアントに対してSSWerとしての基 本的な姿勢を持っているか	4.55	1.01	.236**								
	面談において、以下の点を実施してい るか	4.32	1.22	.296**								
SSWerの マクロアプローチ	教育委員会担当者との戦略的協議	2.54	1.56		-.250*			-.225**				-.228**
	管理職・SSWer担当教員との戦略的	2.16	1.33			.238**				.299**		
	自己評価	2.05	1.33							.317**		

* - は、データ数が極端に少ないなどあり、引き続き精査を行う予定である。

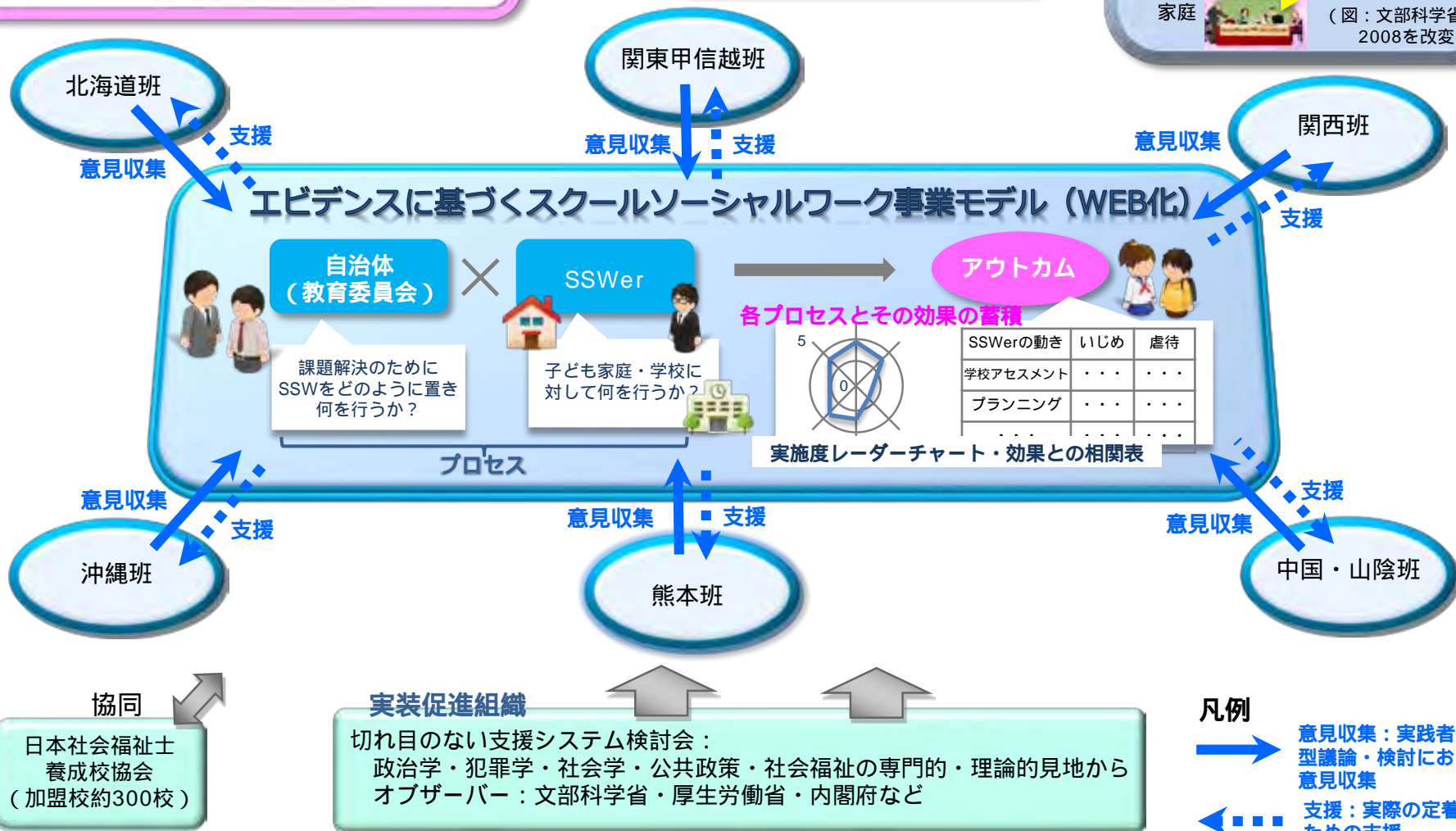
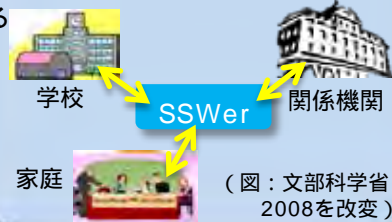
山野則子ほか(2014a)

社会問題：いじめによる死亡例の増加や居所不明児童など、子どもの問題の深刻化：背景に孤立と貧困
見えない貧困や孤立・就学後の連携の困難

実装活動の目標：プログラムのWEB化を行い、拠点地域での実施を進める。その蓄積によってプログラムモデルの定着、推進、そして他地域への普及につなぐ。SSWの役割や位置づけを明確化し、切れ目のない支援システムモデルを構築する。

これまでの研究成果：
全国の教育委員会・SSWerへの調査結果から効果的なSSW事業発展のためのマニュアルを作成。このマニュアル実施の試行調査において、児童虐待事例・家庭環境問題が好転など、量的な効果が確認できた。

スクールソーシャルワーク（SSW）とは：子どもの抱える課題に、生活の視点で環境に働きかけ、ネットワークを活用し、多様な支援方法によって問題解決をはかる



凡例

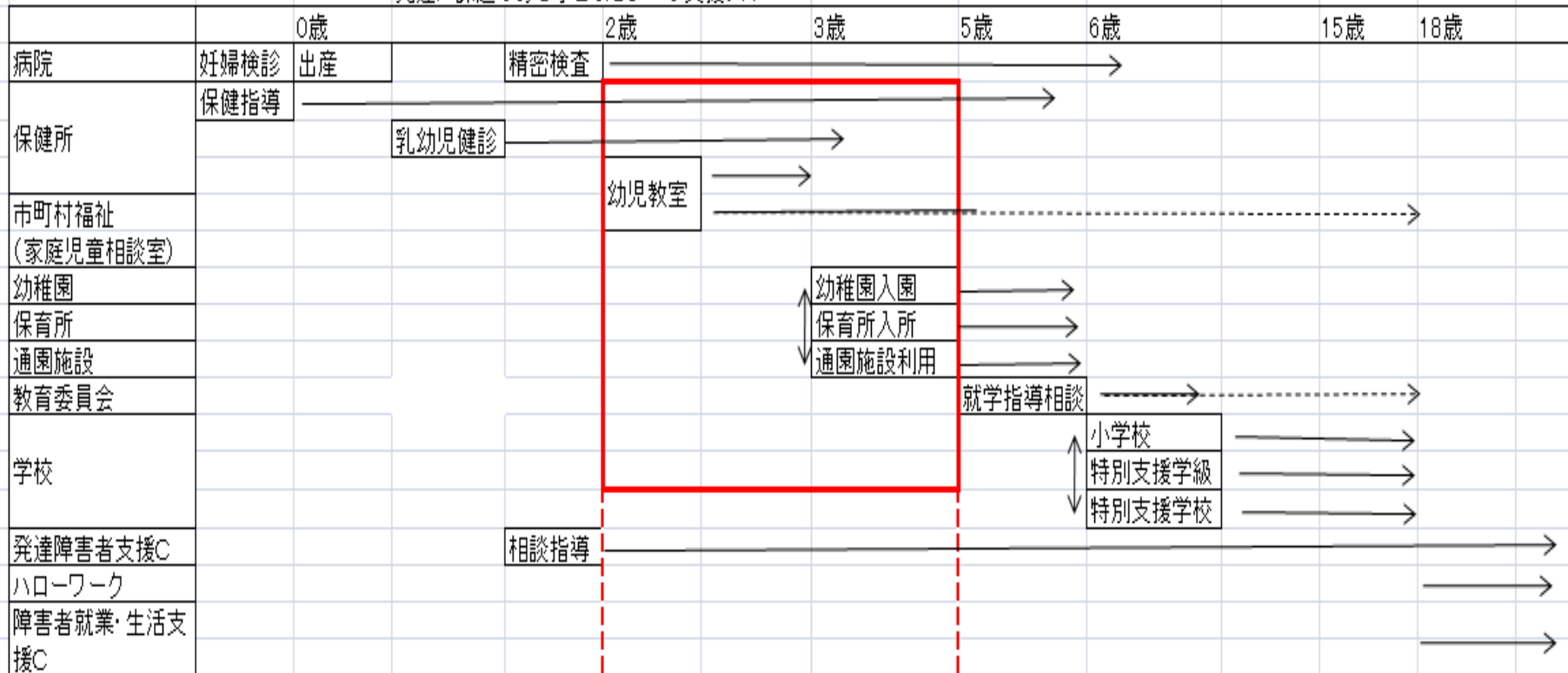
→ 意見収集：実践者参画型議論・検討における意見収集

← 支援：実際の定着のための支援

JSTによる助成 エビデンスに基づくスクールソーシャルワーク事業モデルの社会実装(説明図)

連携システムの課題：学校から切れるマクロ 仕組み作り(ヨコとタテ)

発達に課題のある子どもたちへの支援フロー



定例でこのタテのメンバーで検討会議が開かれている所が多い。しかし、学校へ行くと...